

# なみふる



2012. 10

日本地震学会  
広報紙

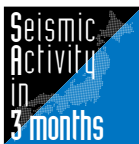
No.  
91

Contents

- 2 巨大地震の前兆?①  
地球潮汐が「最後の一押し」
- 4 巨大地震の前兆?②  
巨大地震直前に上空の電子数が増加
- 6 こどもサマースクール報告  
東と西で何が違う? 境界のまち、糸魚川に挑んだこどもたち
- 7 地震屋ジョニー  
書評「関東大震災を歩く」
- 8 地震学会一般公開セミナーのおしらせ  
第32回記者懇談会の様子



第13回地震火山こどもサマースクール。「フォッサマグナパーク」にて、糸魚川静岡構造線断層露頭を観察するこどもたち。詳しくは6ページの記事をご覧ください。▲



## 主な地震活動

2012年6月～8月

気象庁地震予知情報課  
高濱 聡

2012年6月～8月に震度4以上を観測した地震は21回でした。図の範囲内でマグニチュード(M) 5.0以上の地震は37回発生しました。

「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」の余震活動及び余震域外において「震度5強以上」、「被害を伴ったもの」、「津波を観測したもの」のいずれかに該当する地震の概要は次のとおりです。

### ①平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」の余震活動

余震域(図中の矩形内)では、M5.0以上の地震が11回、M6.0以上の地震が1回発生し、最大は6月18日05時32分に宮城県沖で発生したM6.2の地震(震度4、図中a)でした。この他に震度5弱以上を観測した地震は以下のとおりです。

▶8/30 04:05 宮城県沖 M5.6 (震度5強、図中b) : 負傷者4人(総務省消防庁による(8月30日現在))

②宮崎県南部山沿い  
(6/4 15:51 深さ9km M4.4 震度4)

地殻内で発生した地震で、宮崎県で最大震度4を観測し、住家一部破損1棟の被害が生じました(宮崎県による)。

③長野県北部  
(7/10 12:48 深さ9km M5.2 震度5弱)  
地殻内で発生した地震で、長野県で最大

震度5弱を観測し、負傷者3人、住家一部破損9棟などの被害が生じました(総務省消防庁による(7月18日現在))。

### 世界の地震

M7.5以上、あるいは死者・行方不明者50人以上の被害を伴った地震は以下のとおりです(時刻は日本時間、震源要素、被害は米国地質調査所(USGS)、M<sub>w</sub>は気象庁CMT解あるいはUSGSによるモーメントマグニチュード(9月3日現在))。

▶イラン/アルメニア/アゼルバイジャン国境

(8/11 21:23 深さ10km Mw6.4)  
(8/11 21:34 深さ11km Mw6.3)

ユーラシアプレート内で発生した地震で、現地では死者306人以上、負傷者3000人などの被害が生じました。

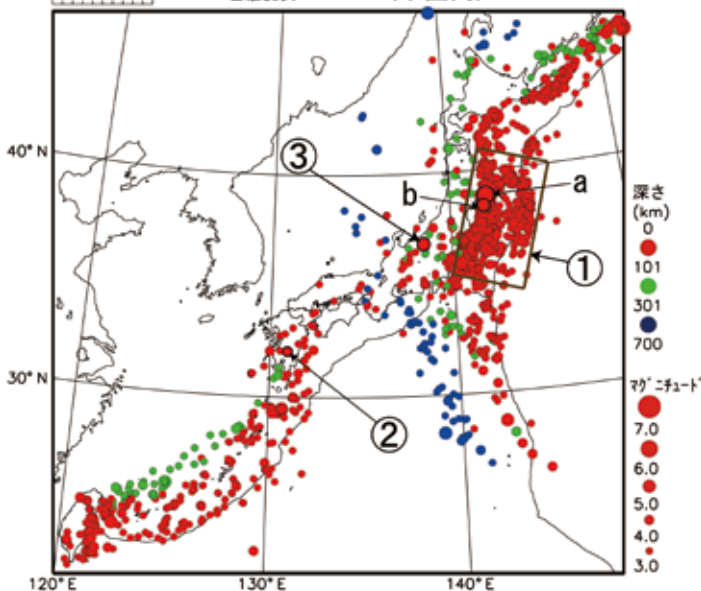
▶フィリピン諸島

(8/31 21:47 深さ35km Mw7.6)

フィリピン海プレート内で発生した地震で、現地では死者1人、負傷者1人などの被害が生じました。この地震に対し気象庁は津波注意報を発表し、東京都の八丈島八重根で0.5m(巨大津波観測計、観測単位0.1m)など、伊豆・小笠原諸島、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸及び南西諸島で津波を観測しました。

「おもな地震活動」の見方の詳細は「なみふる」No.31 p.7をご覧ください。

2012年6月1日～8月31日 M≥3.0  
地震数=2126(下図内)



## 巨大地震の前兆? ①

地球潮汐が  
「最後の一押し」

防災科学技術研究所 田中 佐千子

月や太陽の引力は、海の潮の干満を引き起こすだけでなく、地球そのものも変形させています。「地球潮汐」とよばれる現象で、変形は1日2回、地表面は20cm程度の上変動を繰り返しています。地球潮汐は地震が発生する地下数十キロメートルにも影響し、断層には数十～数百ヘクトパスカルの力が加わります。ひずみが十分にたまった断層では、この地球潮汐のわずかな力が地震の引き金になる可能性が高いことが明らかになりました。

東北地方太平洋沖地震の  
前後の地震を調査

注目したのは、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（以下、東北沖地震）の前後に周辺で発生した地震です（図1）。東北沖地震は、モーメントマグニチュード（ $M_w$ ）が9.0と推定され、地震を引き起こした断層の広がりには長さ500km、幅200kmにも及ぶと報告されています（図1の青の矩形）。この断層の周囲では、1976年から2011年までの36年間に $M_w$ 5.0以上の地震が約500回発生していました。

これらの地震それぞれについて、地震発生時に地球潮汐によって断層にどのような力が加わっていたかを調べました。1976年以降の約25年間は地球潮汐と各地震の発生タイミングとの間に相関関係は見られませんでした。地震は地球潮汐の影響を受けずに発生していたのです。しかし、2000年頃からこれらの相関関係が東北沖地震の震源付近で強く見られるようになり、東北沖地震の発生直前には、極めて密接な関係が存在していたことが明らかに

なりました（図2）。地震は、地球潮汐による力が断層の動く方向に最大となる時刻前後に多く発生していました（図3）。地球潮汐が地震発生の引き金として働いていた可能性を示しています。東北沖地震の発生後には、相関関係は再び見られなくなりました。東北沖地震の発生が近づくと、地球潮汐の影響が強い時刻に地震が集中するという関係は、東北沖地震の破壊が始まった、断層北側部分で顕著であることも分かりました（図4）。

このような傾向は、2004年12月に甚大な津波被害をもたらしたスマトラ島沖地震（ $M_w$ 9.1、なみふる48、49号参照）をはじめ、2005年（ $M_w$ 8.6）、

2007年（ $M_w$ 8.5）にスマトラ島沖で発生したほかの2つの巨大地震でも確認されています。

地球潮汐の力は、地震を引き起こすひずみに比べて1000分の1程度と非常に弱いものです。そのため普段の地

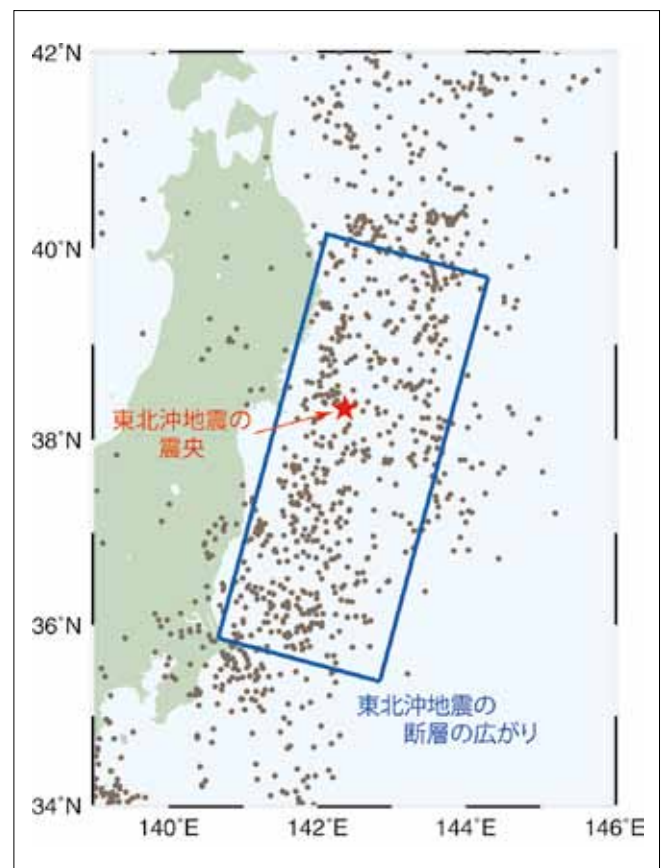


図1 東北地方太平洋沖地震とその前後に周辺で発生した地震（1976～2011年、 $M_w$ 5.0以上）の震央分布。

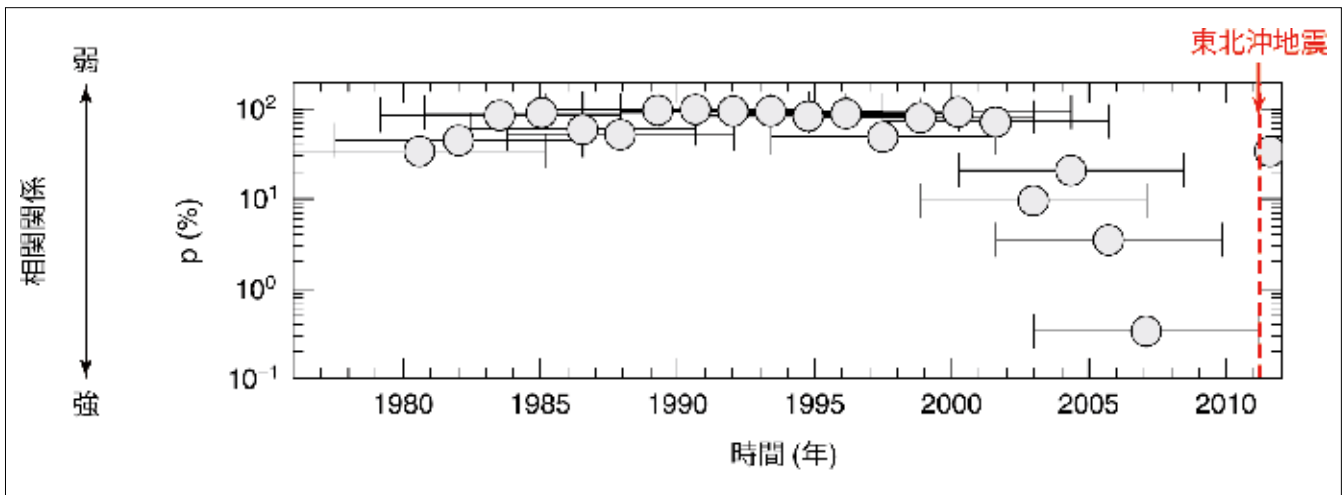


図2 地球潮汐と地震発生時刻の相関関係の強弱を表す指標pの時間推移。pは0~100%の値をとり、小さい値ほど相関関係が強いことを表します。1976年以降、pは100%に近い値をとり、相関関係は見られませんでした。2000年頃から徐々に低下し、東北沖地震の直前にはきわめて強い相関関係が存在していました。東北沖地震の発生後には、pは再び大きくなり、相関のない状態に戻っています。

震の発生にはほとんど影響しません。しかし、巨大地震の発生が近づいて地球内部に十分にひずみがたまった状態になると、地球潮汐のわずかな力が「最後の一押し」となると考えられます。

汐の影響が強いときに地震の頻度が高くなるような場合には、巨大地震の発生が迫っていることを知る手がかりになるかもしれません。

### 巨大地震の発生予測に

巨大地震の発生が近づくと、周辺での地震の発生に地球潮汐が関与するようになるという今回の結果は、巨大地震の発生予測にも役立つ可能性が期待されます。普段起きている地震と地球潮汐の相関関係を追跡し、地球潮

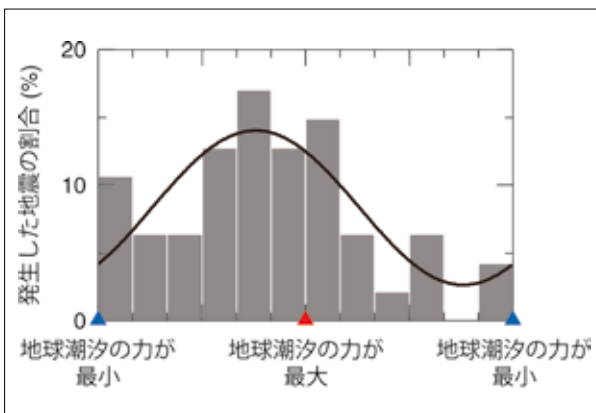


図3 地球潮汐と地震発生時刻の関係。横軸は、地球潮汐による力の変化の一周期分に対応し、地震発生時刻の力の大きさを示しています。一周期は約12時間。東北沖地震直前の3000日間の発生頻度を調べました(曲線は傾向をならしたものです)。地球潮汐による力が断層の動く方向に最も強く働く時刻(赤三角)前後に地震が多発する傾向が見られました。

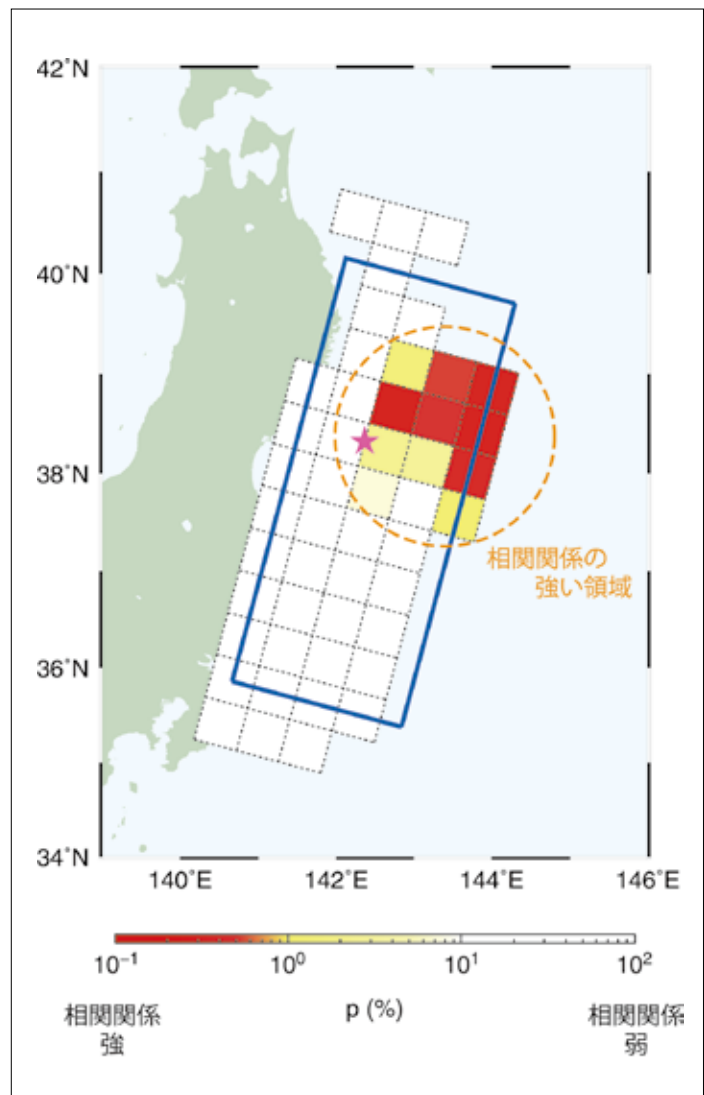


図4 地球潮汐と地震発生時刻の相関関係の強弱を表す指標pの空間分布。東北沖地震の直前3000日分の地震データを用いました。東北沖地震の震源(破壊の開始点、星印)周辺の震源断層北側部分でpは小さい値をとり(赤い領域)、強い相関関係が見られました。

## 巨大地震の前兆?②

# 巨大地震直前に 上空の電子数が増加

Report

2

北海道大学理学研究院自然史科学部門 日置 幸介

地震が電磁気的な前兆を伴った事例は古今東西多く知られています。筆者は、それらをおおむね怪しく思っていたのですが、2011年東北地方太平洋沖地震(M<sub>w</sub>9.0、以下、東北沖地震)直前の電離圏の変化に気付いて認識を改めました。また、他の大きな地震の前にも同じ現象がみられることがわかりました。今では逆に、地震予知が不可能だという人を見ると、なぜ「まだ」そう思うのか不思議に感じます。本稿では巨大地震の一時間程前に起こる電離圏の変化について解説します。

電離圏には太陽の放射によって大気から弾き出された電子が漂っており、GPS衛星から地表に届くマイクロ波の到達を遅らせます。その遅延量は周波数に依存するので、周波数の異なるマイクロ波の遅延の差から、視線にある電子の総数(TEC、なみふる63号参照)がわかります(図1)。

図2は2011年東北沖地震前後のTEC変化を、国土地理院のGPS網で見たものです。衛星の動きに伴うU字形の見かけの変化に加えて、地震の一

時間程前に正の異常が始まっています。異常は震源域から離れると小さくなります。地震の8分後には音波が到来してTECは乱れますが、それが治まった頃には異常は消えています。TECが時間とともになめらかに変化するとしたモデルからの差は、この時刻のTECの一割弱に相当します。

TECは宇宙天気都合でしばしば変動します。東北沖地震は磁気嵐の最中に発生したので、TECの異常が現れやすい状態でした。地震前のTECの

局地的変化が東北沖地震の前にしか現れないなら、それは地震と関係ない可能性が高いでしょう。しかし同じTEC異常がどの巨大地震の前にも見られるなら話は別です。

そこで、2004年12月のスマトラ・アンダマン地震(M<sub>w</sub>9.1、なみふる48、49号参照)、2010年2月のチリ地震(M<sub>w</sub>8.8、なみふる80号参照)、2007年9月のスマトラ・ブンクル地震(M<sub>w</sub>8.5)前後のTEC変化を、GPSデータを集めて解析しました。M<sub>w</sub>8.6の2005年スマトラ・ニアス地震前後はプラズマバブルが活発で、安定してTECを観測できませんでした。なお2010年チリ地震と2007年ブンクル地震の前後の地磁気活動は静かでした。

チリ地震では、東北地方太平洋沖地震の半分程のTEC異常が地震の40-50分前に始まり、電離圏が音波で揺れ始めるまで続きました(図3)。同様のTEC異常は2007年ブンクル地震や2004年スマトラ・アンダマン地震でも見られました。図4はこれらの巨大地震から代表的なTEC変化データを取りだして比べたものです。

試しに同一の局と衛星の組み合わせ

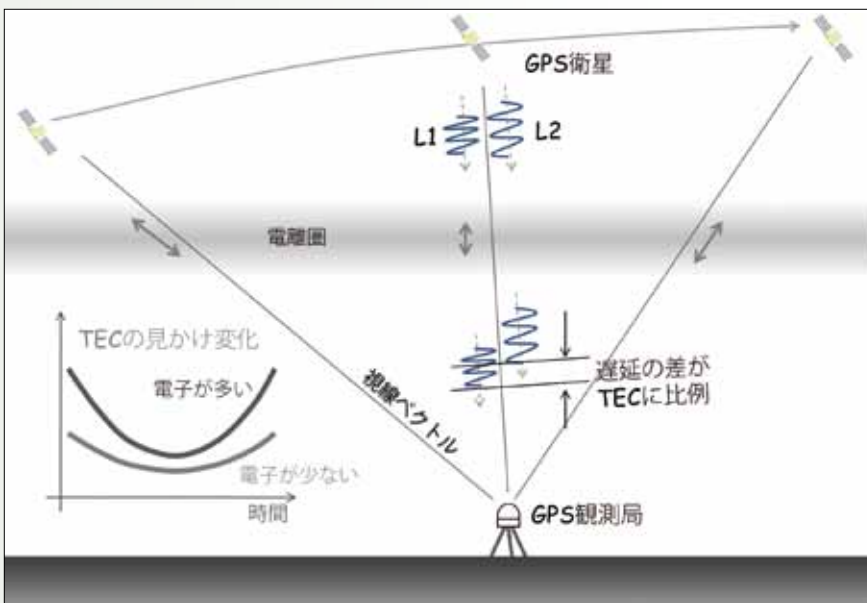


図1 GPS衛星から放出された周波数の異なるマイクロ波(L1、L2)の遅延の差から電離圏全電子数TECが計測できます。TECが一定でも、GPS衛星の動きによってU字形の見かけの時間変化が生じます。

せてTEC変化を数か月にわたって調べてみると、ある程度大きなTEC上昇は地震がなくても時々みられます。それらの多くは日本ではオーロラ帯から南下してくる大規模な移動性の擾乱です。それらは珍しくはありませんが、四六時中起こるものでもありません。ここで挙げた地震前のTEC変化がすべて偶然である確率はゼロに近いでしょう。

M8クラスの地震に関しては、1994年北海道東方沖地震(Mw8.3)の前に弱いTEC異常が見つかりました(図4)が、2006年千島地震(Mw8.2)や2003年十勝沖地震(Mw8.0)では確認できませんでした。この前兆はM8台でも大きめの地震でないと見えないようです。小さな地震の前に見えないことは、大きな地震の前に必ず見えることと同じくらい重要であると思います。

残念ながら地震直前になぜ上空で電子数が変わるのか本当の理由はわかりません。しかし地表近傍がプラスに帯電することで説明できる可能性はあります。正電荷を供給するメカニズムとしては、圧縮された火成岩から正孔が拡散してくる室内実験が有名です。ただ、実際の地震前にそのような現象が生じたことを野外で直接観測した例はありません。原因の特定には、電磁気的なセンサーを密に展開するしかないでしょう。

これまでの地震前兆報告との大きな違いは、時間空間的相関の明快さに加えて、追試の容易性です。GPSデータの入手は簡単ですし、筆者のホームページ(<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~heki/>)でGPS生データからTEC情報を抽出するプログラムも公開しています。興味がある方は追試してみてください。地震の直前予知に光が見えてきます。

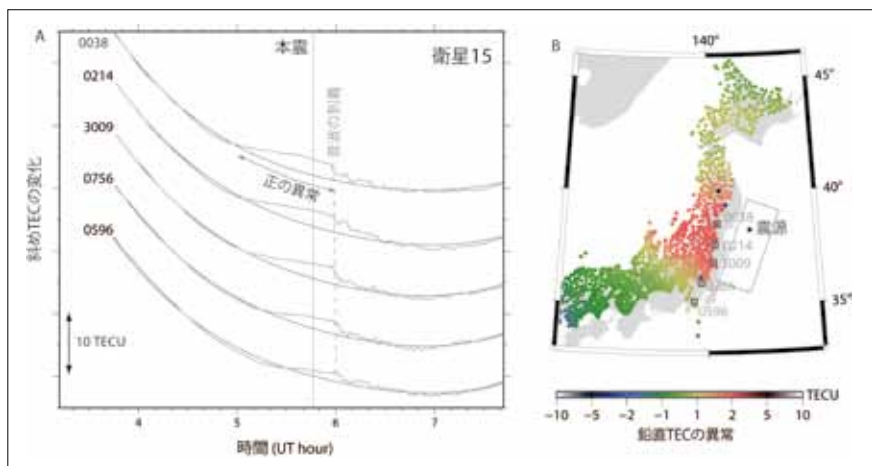


図2 (A)東北沖地震前後に15番のGPS衛星を観測して得られたTECの時系列。(B)地震一分前(5:45UT)におけるTECの異常分布を色で示し、視線と電離圏(高さ300kmと仮定)の交点を地図上に投影した位置(SIP)にプロットしたものを。四角はAで時系列を示した点を示します。

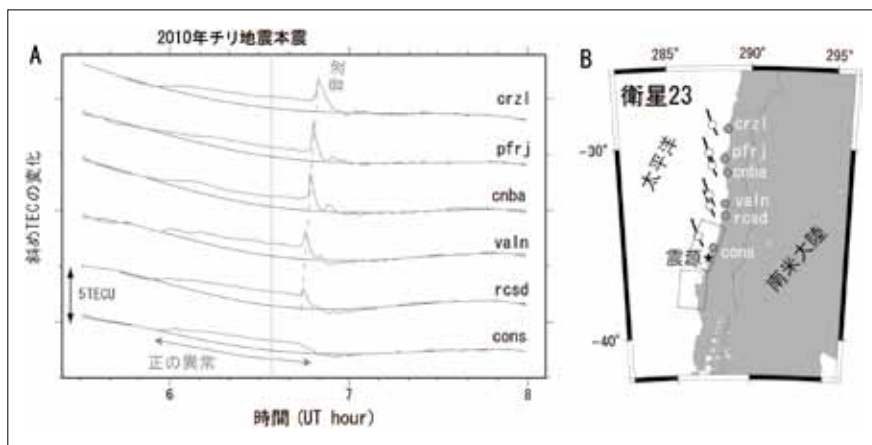


図3 (A)2010年2月のチリ地震前後に23番のGPS衛星を観測して得られたTECの時系列。(B)チリ沿岸部の地図。灰色の丸はGPS局を示します。黒い曲線はSIPの6-7時UTの間の軌跡。白丸は地震発生時のSIP。

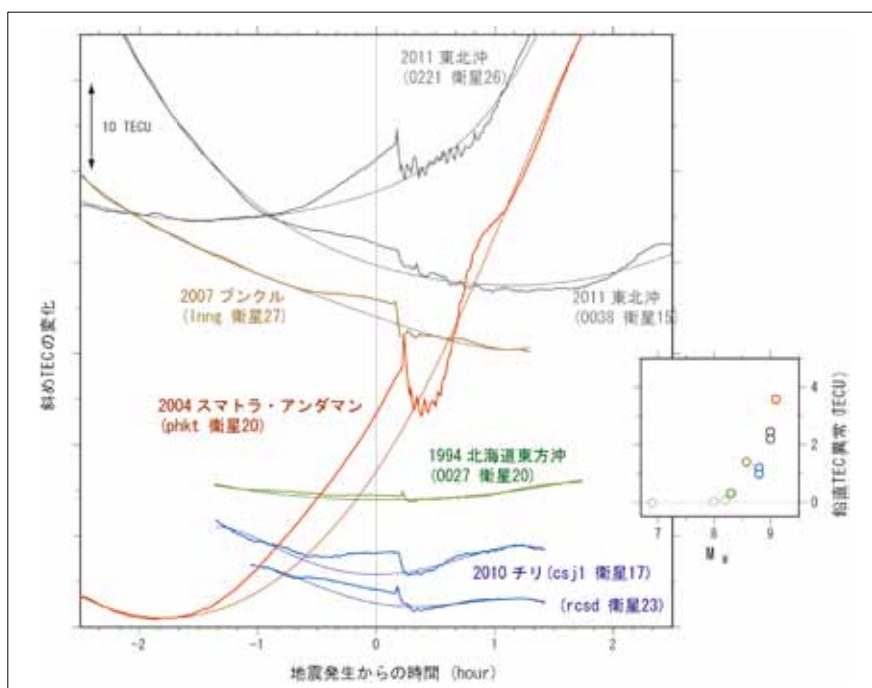


図4 様々な地震の前後のTEC時系列を、同一のスケールかつ地震発生時刻を共通にとって比較したもの。地震直前のTEC異常を鉛直方向に換算したものを、マグニチュードMwと比較した図を右に示します(異常が観測されなかった2003年十勝沖地震等も含まれます)。右図の丸の色は左図の曲線の色に一致。

## 第13回地震火山こどもサマースクール「東と西に引き裂かれた大地のナゾ」

## 東と西で何が違う？

Report

3

## 境界のまち、糸魚川に挑んだこどもたち

こどもサマースクールコーディネーター 松本 翔太 (神戸大学1年、2010年参加者)

日本地震学会、日本火山学会、日本地質学会を中心に夏に実施されている「地震火山こどもサマースクール」。今年には新潟県糸魚川市の「糸魚川世界ジオパーク」で「東と西に引き裂かれた大地のナゾ」と題して8月18日、19日に開催。小・中・高生33名が6つのチームに分かれてナゾに挑みました。

「日本列島の東と西の境目はいったいどこにあるのでしょうか?」。最初の課題のために上った、市内を一望できる展望台では、風景の中から東西の境目を探すこどもたちの表情は真剣そのもの(写真1)。

次に、「西」の山から流れてくる「姫川」と「東」の山から流れてくる「根知川」の合流点の河原で石を拾い、東と西とで石にどんな違いがあるかを考えました。

## 再現実験で膨らむイメージ

午後は実験とお話です。まず、日本列島の形成をパラパラマンガ風にして学んだ後、兵庫県立神戸高校生3名が準備してきた小麦粉やきな粉を使った実験に取り組みました。日本列島の形が出来上がってくる変化が自分の手で再現されることにこどもたちは興味津々。日本海の形成で凹んだフォッサマグナに、周囲から砂や泥が溜まって地層が出来る

様子を再現する実験なども行いました。

ホテルで入浴と夕食を済ませた後は「学者と語ろう」の時間。糸魚川市出身で主任講師を務めた東北大の松澤暢教授らから、学者を志したきっかけなどの話を聞くことでこどもたちも親近感を覚え、距離を縮めることが出来たようです。

## 西と東の違いを、「石」と「水」で確かめた

2日目の最初は、東のフォッサマグナ側で“新しい”堆積岩の露頭で「1000万歳の石」を拾いました。なんと魚の鱗の化石を見つけたチームもあり、みんなで仰天しました。

次に、糸魚川静岡構造線の断層露頭を観察できるフォッサマグナパークでは、西側の“古い”堆積岩の露頭で「2億6000万歳の石」を拾い、「1000万歳の石」とこすりあわせて石の硬さ比べをしました。断

層の露頭では、岩がこすれあって粘土になっている様子を目の当たりにし、東側の水と西側の水を、生活水と仕込みの水に使い分けている断層上の酒造から提供された東西の水の味比べをするなどして、東西の違いを認識しました。

フォッサマグナミュージアムで学んだこととおさらいし、発表会場の「ビーチホールまがたま」で昼食を食べた後、発表の準備をしました。

ステージでは、フォッサマグナの凹みに土砂が流れ込む様子を「ザザー」と滑り込むパフォーマンスで表現したり、日本海の形成で新説を発表したりと、例年以上に個性的な内容でした(写真2)。

発表を終え、「糸魚川ジオパークこどもマスター」の認定証を受け取ったこどもたちの表情は達成感に満ちていました。きっと、今回経験したことを広め、ジオパークを発展させる源となってくれるでしょう。



写真1 展望台から風景を観察。地元のこどもたちでも頭を抱えてしまう難題に挑戦!



写真2 日本列島の東西と糸魚川をパフォーマンスで発表するチームも。

# 地震屋ジョニー

Report

4

東京大学地震研究所 桑原 央治

地震国日本での近代地震学の扉は、お雇い外国人の手によって開かれます。今から140年前の明治5年(1872年)頃には早くも観測が始まりますが、本格的な研究にはジョン・ミルン、ジェームス・ユーン、トマス・グレイの3人を待たねばなりません。

## 地震開眼

地質学・鉱物学の教師として招かれた英国人ミルン(1850-1913)は、単身ロシア・シベリアを馬車で横断、モンゴル・中国を経て、明治9年に26歳で来日します。翌年の伊豆大島への渡航をかわきりに、来日後数年間に50以上の火山を踏破し(図1)、函館ではモース教授と貝塚の発掘、千島・カムチャツカへ渡って日本人種論におよぶなど、彼の新鮮な好奇心・探究心には限りがありませんでした。その貪欲ともいえる探究心をさらに大きく進めたのが、明治13年の横浜地震でした。彼は6mと9mの長い振子を用いて揺れを観測するとともに、12項目にわたる質問用紙500部を広く配布するなどして聞き取り調査を試みます。

## 世界で最初の地震学会

そして一月後、世界で最初の地震学会である日本地震学会を設立。会員120名弱の多くは外国人であり、英国外交官アーネスト・サトウ、東洋美術史家としても名高いフェノロサ、明治天皇の肖像を描いたキヨッソーネなど多彩な顔ぶれでした。

彼は設立総会の冒頭演説で、新しい地震学は「地震ノ記載」に止まることなく、「地震ノ原因」と「其ノ万物ニ及ボス影響」を広く論究する必要があると進むべき研究の方向を示し、収集した諸現象に振

り回されることなく、理論的な可否をまず論じようという姿勢を明確にします。さらには現在の太平洋津波警報センターや緊急地震速報につながるアイデアさえ提示しています。その一方で、ユーン、グレイとの切磋琢磨・協力によって、以後の諸研究の根幹となる実用に足る地震計を開発し普及させます。

## 地震屋ジョニー

他の2人は契約期間を終えると帰国し、地震学からも離れていきますが、ミルンはより一層地震研究に没頭し、友人たちからは「地震屋ジョニー(または地震屋ミルン)」とあだ名されていました。彼は函



写真1 ワイト島の地震観測所にて。左端ミルン、右端トネ、中央はロシアのボリス・ガリツィン(ご遺族よりご提供)。



図1 ミルンがこの当時に踏破したと思われる火山と彼が決めた東日本の地震の震央マップ。彼の研究の足跡が読み取れます。

館生まれの堀川トネを妻とし、19年間におよぶ長い日本での研究、さらに母国イギリスへ戻ってからもワイト島に研究の基盤を設け(写真1)、一貫して地震研究に身を捧げます。夫の死後トネは帰国し、彼女の実家・西本願寺函館別院の墓地にはミルンの遺髪も納められました。

2012年秋季大会はその函館の地で行われます。日本地震学の基礎を築いたミルンのお墓参りに足を運んではいかがでしょうか(図2)。

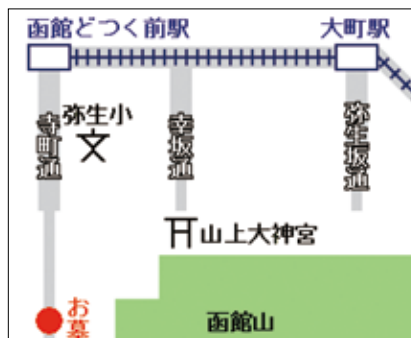


図2 ミルン夫妻のお墓の所在地。北海道函館市船見町26番地。市電「函館どつく前」駅から徒歩15分。

書評

関東大震災を歩く

(武村雅之著、吉川弘文館)



武村さんは、大きな声で、ともしれば学問の世界に閉じこもりがちになる地震学者達に世間の風を吹き込んでくれる人です。あるいは、世間の風に過剰に反応しようとしてしまう地震学者たちを逆に押しとどめてくれる人でもあります。絶妙なバランス感覚の持ち主で、私も武村さんに教えていただく事が多いです。

さて、東日本大震災から1年を経て2012年3月に刊行された本書の目的は、約90年前の関東大震災の苦しみとそこから立ち上がった跡を伝える事によって、東日本大震災からの復興を応援する事と関東にもいづれやってくる大地震への備えを求める事です。

武村さんは、東京近辺に残る関東大震災の慰霊・鎮魂・復興とそれに伴う苦難の痕跡を、自ら撮影した写真を主に用いて淡々と紹介していきます。武村さん自身の意見や感想の表現は抑えられ、それらの痕跡が個々に示す人々の思いに語らせようとしているかのようです。紹介されている場所は260カ所に及び、巻末に一覧表と地図が載っていて、本書を読んだ人間が誰でも訪れることができるようになっています。私自身が、何度も通っているのに、碑や像の存在を全く知らなかった場所がいくつもありました。本書を片手に、改めてその場所を訪ねてみようと思っています。

本書を読んで私が感じたのは、自然現象としての地震に関心を集中させるあまり、地震が人にもたらすものについてあまりにも無知であったという反省です。一般の人々に加えて、多くの地震学者にも読んでほしいと思います。  
(産業技術総合研究所 小泉 尚嗣)

広報紙「なるふる」購読申込のご案内

日本地震学会の広報紙「なるふる」は、3カ月に1回(年間4号)発行しております。「なるふる」の購読をご希望の方は、氏名、住所、電話番号を明記の上、年間購読料を郵便振替で下記振替口座にお振り込み下さい。なお、「なるふる」は日本地震学会ホームページでもご覧になれ、pdfファイル版を無料でダウンロードして印刷することもできます。

■年間購読料(送料込)

日本地震学会会員 600円  
非会員 800円

■振替口座

00120-0-11918 「日本地震学会」  
※通信欄に「広報紙希望」とご記入下さい。

地震学会一般公開セミナーのおしらせ

地震学会秋季大会開催に合わせて、一般公開セミナー「北海道の将来の地震・津波に備えて～東日本大震災の教訓に学ぶ」を開催します。本セミナーでは、講演とパネルディスカッションを通して、地震学の現状と過去の災害について知り、地域で取り組むべき防災活動について共に考えていきます。多数のみなさまのご来場をお待ちしています。

日時：2012年10月20日(土) 13時30分～16時30分(13時開場)

会場：函館市民会館小ホール(函館市湯川町1-32-1)

主催：公益社団法人日本地震学会

共催：北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センター 後援：函館市ほか

プログラム

- 講演1「東日本大震災と今」島崎 邦彦(東京大学名誉教授)
- 講演2「函館市の地震・津波災害について」谷岡 勇市郎(北海道大学教授)
- パネルディスカッション「東日本大震災後の地震学と函館市の防災活動」

コーディネーター：定池 祐季(北海道大学助教)

パネリスト：島崎 邦彦、谷岡 勇市郎、斎藤 祥司(札幌管区気象台地震情報官)、  
武下 秀雄(高丘町会会長)、丸藤 競(函館市地域交流まちづくりセンター長)

参加申込み：事前申し込み不要です。直接会場にお越しください。

お問い合わせ：北大地震火山研究観測センター地域防災情報支援室

011-716-2165 (FAX)、isv-web@mail.sci.hokudai.ac.jp



日本地震学会広報紙  
「なるふる」第91号

2012年10月1日発行  
定価150円(郵送料別)

発行者 公益社団法人 日本地震学会  
〒113-0033  
東京都文京区本郷6-26-12  
東京RSビル8F  
TEL.03-5803-9570  
FAX.03-5803-9577  
(執務日:月～金)  
ホームページ  
<http://www.zisin.jp/>  
E-mail  
zisin-koho@tokyo.email.ne.jp

編集者 広報委員会  
松原 誠(委員長)  
弘瀬 冬樹(編集長)  
伊藤 忍、石川 有三、石山 達也、  
岩切 一宏、桶田 敦、亀 伸樹、川方 裕則、  
楳原 京子、小泉 尚嗣、武村 雅之、  
田所 敬一、田中 聡、古村 孝志、  
松島 信一、八木 勇治、矢部 康男

印刷 レタープレス(株)

※本紙に掲載された記事等の著作権は日本地震学会に帰属します。

第32回記者懇談会の様子

地球惑星科学連合大会の期間中である5月21日に、幕張メッセ国際会議場において第32回記者懇談会が開かれました。参加者は30名で、うちマスコミ関係者が13名でした。

はじめに、平原前会長の挨拶があり、その後、加藤新会長が、東北地方太平洋沖地震を受けて結成された臨時委員会が主体となったユニオンセッションや地震学会の2012年度の活動内容について紹介しました。

続いて、広報委員でもある武村雅之名古屋大学教授が講師となって「震災と復興：関東大震災を振り返る」と題した講演を行いました。関東大震災後の復興の様子が詳しく説明され、復興状況や社会構造についての当時と現在との比較が説明されました。講演終了後、記者との質疑応答が交わられました。

今後も春・秋の学会に合わせて記者懇談会を開催する予定です。地震研究に関するホットな話題も聞ける絶好の機会ですので、マスコミ関係者の方々には奮ってのご参加をよろしくお願い致します。

日本地震学会広報委員長 松原 誠

